

『#満願』（米澤穂信著）を大活字本で再読してみた。著者は、『折れた竜骨』で第64回日本推理作家協会賞、本作で第27回山本周五郎賞受賞、『黒牢城』で第166回直木三十五賞受賞、等を受賞している。

『満願』は推理小説短編集である。史上初のミステリーランキング3冠に輝いた。「夜警」「万灯」「満願」の3編がNHKでミステリースペシャルとして2018年8月にテレビドラマ化されたそうだ。

「夜警」

最初に出会った時の負の印象が、そのまま最後の不幸につながっている話である。

K巡査の葬儀が終わった後、Y巡査部長は「あいつは警官に向かない男だったと」振り返る。Kはすぐに拳銃を抜こうとする癖があった。また、失敗を小細工でごまかそうとする男だった。そのKが夫婦喧嘩（DV）の仲裁に入り、短刀を向けて突っ込んでくる男に発砲するも、刺されて死ぬ。殉職扱いで葬儀が行われたが、YはKの過去の行動から違和感を持つのだ。当日、交番近くで作業員のヘルメットに石が当たったエピソードがあった。これが伏線になっている。短刀を向けて突っ込んでくる男にKは何発も発砲した。Kは、血を吐きながら最後に「こんなはずじゃなかった。うまくいったのに。」とつぶやいて死んだ。

Yの違和感と作業員のヘルメットに石が当たったエピソード、「こんなはずじゃなかった」という死に際の言葉が、Yの推測で一つの「オチ」に収束していく。これは傑作だ。読者はわかるだろうか。NHKの動画も観てみたい。

「死人宿」

2年前に失踪したS子が、山奥にある温泉宿で仲居として働いていることを知った私は、宿に車で向かう。その宿は「死人宿」（自殺の名所）で有名であった。温泉の脱衣所に置き忘れられていた遺書をS子が私に渡し、3人の宿泊客のうち誰が書いた遺書なのか突き止めるよう私に依頼する話。誰が遺書を書いたのか。

「柘榴」

美人のS子は、妙に異性を魅了し誰もが彼を好きにならずにいられない不思議な魅力を持つN男と、大学のゼミで出会い婚約する。しかし、N男は生活力がなく、結局離婚することになる。裁判で2人の娘、母の美貌を受け継いで美しく育ったY子とT子の親権を争うことになる。どう考えてもS子が親権を得ると思

われたはずが、そうならなかった。なぜか。娘たちの行動と思惑がその結論を導いたのだ。長女 Y 子の妖艶さが信じられない。女性ってそんな風に考え、行動するのか。100 人も一人もいないだろう？ 妙に印象に残る。

「万灯」

商社に入社して以来、仕事一筋に生きてきた I は、開発室長としてバングラデシュで天然ガス資源の開発に挑んでいた。そこで開発権を得るためにフランスの会社に勤める男と一緒に現地へ赴くが、交渉は難渋する（その時出されたぬるい紅茶が伏線になっている）。結局、交渉権を得るために現地の有力者を殺害することになる。そして、罪の意識に苛まれ弱気になって帰国した男を追って、第二の殺人を犯す。完全犯罪であったはずが、世の中で起こったふとしたことが契機に破綻してゆく。

「関守」

先輩ライターに「死を呼ぶ峠」のネタを提供してもらった主人公。それは伊豆半島の先端にある Z 町に行くには必ず通らなくてはいけない K 峠のカーブであった。4 年で 4 件、死者 5 人の車の事故が起きていた。主人公は、K 峠のドライブイン店主のばあさんに取材をする。このばあさんが関守なのだ。4 件の死亡事故をすべて記憶していた。どうしてここで事故が起きたのか。読み進めると関守ばあさんが関わる事故であったことがわかってくる。

「満願」

弁護士の F は学生時代、司法試験の勉強に苦しんでいたときに、下宿していた畳屋の妻 T 子に達磨市に連れて行ってもらった思い出がある。F は在学中に司法試験に合格した。その 4 年後、T 子は夫の借金返済を迫る貸金業の社員 Y を殺害してしまった。F は T 子の弁護を請け負うが、懲役 8 年の実刑判決が下された。T 子は夫の病死を聞いた直後、控訴を取り下げたため、一審の刑が確定してしまった。そして 8 年後、刑期を終えて出所した妙子が事務所に来るまでの間、藤井は事件を振り返っていた。部屋に置かれた達磨の向きや掛け軸の血痕から F が推理をする。なぜ、妙子は控訴を取り下げたのか。あれは本当に正当防衛だったのか。

些細な謎を推理して、納得の結論を導いてくれる。一度読んでいたはずなのに忘れている。読書に時間を費やしてよかったと思える休日であった。